



学校だより

10月号
横浜市立桜台小学校
2018年9月28日発行

年度後半のスタートに寄せて

校長 西尾琢郎

新学期が始まる日、まわりのみんなが「おはよう、今日から学校だね」って笑顔で言葉を交わすとき、「私は学校に行きたくない」ということを考える気持ち、何となくわかります。だから思うの、そう思うこと、それはそれでいいじゃないって。

夏休みが明けてからひと月あまり、多くの子どもたちは、すっかり学校での生活リズムを取り戻しつつあります。来週金曜日には、前期終業式を迎え、翌週からは、いよいよ後期の授業がスタートします。

冒頭の一文は、先日お亡くなりになった女優・樹木希林さんが、不登校をテーマにした講演で語ったものです。横浜の地で学生時代を過ごした樹木さんですが、ご自身も「学校に行かない日もあった」けれども、「学校に行かないからって、何もしないわけじゃない」と仰いました。そして、不登校の子どもたちに向けて、「学校には行かないかもしれないけど、自分が存在することで、他人や世の中をちょっとウキウキさせることができるものと出会える。そういう機会って絶対訪れます」と話されたそうです。

学校では長い間、自分の「行きたくない気持ち」と戦って、それに打ち克つことを求めてきました。克己心というのは、確かに大切なものです。しかしその一方で、「行きたくない気持ち」を、ただ力尽くで抑え続けた結果、「生きたくない気持ち」につながってしまう、という悲しい例もまた、実際に存在します。自死という最悪の形に至らないまでも、「自分を殺して生きていく」ことが、処世術として知らず知らずの間に染みついてしまうのだとすれば、それはやはり教育の敗北ではないかと思うのです。

もちろん、怠け心から好き放題に過ごすのがよいわけはありません。しかし、学校に行くこと、勉強をすること、スポーツに励むこと、そのどれもが、いやいややっても、実になるどころか、それを嫌いにする結果しか生みません。私たちがすべきことは「良薬は口に苦し」と繰り返し唱えることではなく、それがなぜ良薬なのか、どうしてそれに取り組むべきなのかを粘り強く伝えることです。また、本当に身体にいい薬なら、それを無理なく口にできる糖衣錠を工夫したり、同じく身体にいい食べものならば、それをおいしく食べられるように料理したりすることなのです。苦しいことを押し殺すのではなく、好奇心を調味料に、いかにして楽しみに変え、自分の血肉とすることができるか。その術こそが「生きる力」であり、本当の克己心なのではないでしょうか。

私たち大人の働き方も、生き方も、日々、急速に変化しつつあります。子どもたちが生きるこれからの時代にはなおさらです。「組織や集団の中で我慢していれば一生が保証される」という時代は、すでに過去のものだと言っているでしょう。生きるとは、幸せとは何か。我々教職員も子どもたちと一緒に、これからの時代を自分らしく生きる力を求め、学び続けていきたいと思っています。希林さんの背中を追いかけて。